2023年1～2月掲載分

習志野　大慈弥 爽子

住み古りし谷戸を深めて梅探る
寒月の白さが闇をこはばらす
青くなる空へと開き初めし梅
廻ることなき金銀の飾独楽
白魚の透ける命のはねる枡

八王子　石井　蓉子

真知子巻して寒き一日を過す
一日を使い切ったる賀状書き
北風に洗濯物がこごえそう
食べられる事の幸せ冬至がゆ
バレンタイン少女の頃に戻りたし

新宿区　壺守　景子

山茶花の一片からの崩れかな
初鴉一声置いて飛びにけり
どんど爆ぜあとづさりする子犬かな
葉一枚閉じ込め池の氷たる
春寒し旅の衣に迷いたり

町田　小森　まさひこ

ご神木に祈る佳人の淑気かな
農高生の輪番登校三が日
投句締め午前八時てふ初句会
冬の靄生まれ山湖の夜明けかな
雪の間の畝に立ちたる緑かな

2023年3～4月掲載分

習志野　大慈弥 爽子

やはらかく典雅に灯す雛の宿
気力体力ためされてゐる余寒
茎立の花もろともに漬け込みぬ
うららかや行きも帰りも渡し舟
音を立て塩吹き散らす夜の浅蜊

八王子　石井　蓉子

寒明て青空どこか穏やかに
大空に白き月置き冬終る
北窓をそっと開いて深呼吸
美容院鏡に春めく髪の吾
クロッカス真中にお日様置いてをり

町田　小森　まさひこ

雛飾る文学館の一室に
主無き一年たちし庭の春
俳磚の文字の浮き出す春の雨
六甲に色生まれそむ汀子の忌
文学館に伸びたる梅の盛りなる

2023年5～6月掲載分

習志野　大慈弥 爽子
逃水や今は昔となりし夢
囲を張れるどれが蜘蛛の手蜘蛛の足
水草の花の呟くやうな揺れ
粗土へ託す祈りや棉を蒔く
風紋を揺らす浜昼顔の波

八王子　石井　蓉子
チューリップ恋する色となってをり
雨音が眠りを誘う春の朝
柳の葉ゆらりゆらりと五月かな
奥さんと言はれ手にする初鰹
ランドセルの返す光や夏近し

新宿区　壺守　景子
鮎釣るや白波返す酒匂川
覗き込む田水の底に蝌蚪の紐
冷房の届かぬ犬の息荒し
虚子やぐらシダ伝い落つ岩清水
若き日の想ひ出一新衣更

町田　小森　まさひこ
五月雨の怒涛となりて最上川
大夏木芭蕉はここで船に乗る
山寺の静寂に出る玉の汗
太陽の大きく赤く日本海
田水沸く陸の松島みどりたつ

2023年7～8月掲載分

習志野　大慈弥 爽子
移る日へ大きく傾げ砂日傘
梅漬や母に床下てふ宝庫
およがせて手に掬ひ上ぐ新豆腐
叩きては撫でて西瓜の声を聞く
堰音に聞く純白の秋の声

八王子　石井　蓉子
父の日や暑いねとしか言へなくて
向日葵の色に平和を願ひたる
紫陽花に送り出されて通所せり
つつましき一人の暮らし枇杷熟るる
おはようと日傘まはして笑顔なる

新宿区　壺守　けいこ
残鴨田水汚して草を食む
姨捨の満月に来て五月闇
万緑に狭ばめられたる空の青
虚子庵の縁側ゆかし五月晴
ふんはりと膨らむ布団五月晴

町田　小森　まさひこ
黒百合や急登森林限界まで続く
雪渓を一直線に登りけり
ご褒美のお花畑に出会ひたる
武蔵野の広き夜空の稲の殿
おしろいの奥の暗きに流れあり

2023年9～10月掲載分

習志野　大慈弥 爽子

焦点を暈し花野の色となる
灯を消して虫の闇へと開く窓
冷やかに残る礎石の語るもの
妖艶にしてひんやりと曼殊沙華
ほとばしる音に酔ひもす新走

八王子　石井　蓉子

雨粒は空の涙か秋に入る
大き音で時刻や熱帯夜
一杯の水飲み干すや終戦日
髪洗ふ今日にさよならするために
尋ねくる日焼けせし兄の笑顔かな

新宿区　壺守　けいこ

住職の留守の汀子碑蝉時雨
新涼を窓いっぱいに掃除せり
六地蔵の帽子に垂るる萩の花
魚焼く煙流れて秋の暮
長夜や書いてまた消す下五かな

町田　小森　まさひこ

刻々と刻々と台風進み来る
風雪に耐へし伽藍や萩の花
振り返る時木犀を振り返る
薪割や乾ききったる音や秋
秋空に斧振り上げて薪を割

2023年11～12月掲載分

習志野　大慈弥 爽子

大白鳥首の眠気を折り畳む
薬効を信じ根深の香を愛す
ふと母の笑顔を重ね一葉忌
光なす日の斑を散らす木の葉かな
鄙棲みの炭もて炭を割る暮し

八王子　石井　蓉子

明けきらぬ空を見上げる夜長かな
十五夜のうさぎと会話してをりぬ
手袋や母の手ぬくくありにけdり
手帳買うことより冬の支度かな
アベマリア歌って一人のクリスマス

新宿区　壺守　けいこ

炭焼きの白き煙が目に滲みる
二胡の音の流れ隅田の暮れの秋
遠山の光に紅葉冴えわたる
遠富士や窓に灯の洩る冬の街
売り尽くし殺気も交じり十二月

町田　小森　まさひこ

曇天に伸び輝ける黄葉かな
紅葉の中に静もる女学園
枯芒己は色を持たざりし
木枯らしを押さえ署名せり
宮奥に生る淑気の溢れ来る